『英草紙』第三篇における「音」の本義

川田真輝

一

『英草紙』第三篇「豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話」（以下「豊原兼秋」）は、中村幸彦氏による新編日本古典文学全集（以下「新編全集」）頭注[1]にあるように、「『太平記』中の人物を登場させ、『警世通言』（または『今古奇観』）所収の「兪伯牙摔琴謝知音」に筋を借り、著者の音楽の知識を盛り込んだ作品」である。

「豊原兼秋」のあらすじを以下に示す。後醍醐帝が隠岐に配流されていた頃、後醍醐帝の臣下豊原兼秋は、笙の演奏によって帝の復権を予知し、再び後醍醐帝の臣となった。元弘三年の秋、兼秋は、伊予国に宣旨の使いとして赴いた帰途、琴を通じて木樵横尾時陰と出会う。兼秋は、時陰が演奏した曲の心を言い当てたことに感心し、時陰と義兄弟の契を結び、翌年の同日（八月十五日）に再会することを約束し、都に帰った。翌年、兼秋は約束の日に時陰を訪ねるが、既に時陰は故人であることを時陰の父から知らされる。兼秋は時陰の墓前で琴を奏する。それを聞いた村人は退屈な演奏だと嘲笑し、兼秋は、琴を理解するものがいなくなったのを悟り、琴を叩き割る。そして、兼秋は、時陰になりかわって時陰の両親に孝行し、時陰の父母の最期を看取り、自らは法体となった。

原話である白話の「兪伯牙摔琴謝知音」（以下「兪伯牙」）は、兪伯牙と鍾子期が琴を通じて義兄弟となり、翌年の再会を約束するが、翌年、伯牙が子期を訪ねるも、子期が既に故人であることを子期の父に知らされ、琴の断弦の後、伯牙は子期の両親に孝行するという話である。琴によって義兄弟の契を結び、木樵の死後に断弦するという点、「豊原兼秋」が「兪伯牙」に話の大筋を借りていることは確かである。

両話の関係について、麻生磯次氏「讀本の發生と支那文學の影響」[2]は、次のように述べる。

> この両話に於ても筋書の完全な一致を見るのである。即ち原話の兪伯牙と鐘子期との關係を豊原兼秋と横尾時陰との關係に引直したにとどまるのである。

「豊原兼秋」は、「兪伯牙」の登場人物を替えただけで、話の内容は同一だというのである。

一読すると、「豊原兼秋」は、確かに原話の「兪伯牙」と全く同一の筋の物語のように見える。しかし、事情はそう単純ではない。「兪伯牙」は、『列氏』「湯問」に見える兪伯牙と鍾子期の「知音」

の故事を題材にした、友情が主題の物語である。一方、「豊原兼秋」の兼秋も白話同様に時陰の両親への孝行を約束するが、それは時陰との友情のみによるものではない。その点について、石破洋氏「都賀庭鐘の翻案態度―『英草紙』第三篇における琴を中心に」[3]は、以下のように述べている。

原據において、風流の政府高官たる伯牙が友情のために集賢村に住むようになるのと、庭鐘が琴の神祕・予兆性を政治に結び付け、政治の未來を予知し、帝を批判して山中村に隠遁してしまう叙述をしたのと比較すれば、兩者の主題そのものが全く別のものとなったのは明白であろう。

石破氏は、「豊原兼秋」が、白話とは違って、兼秋の帝批判と隠遁いう政治性を主題としたと指摘する。また、「豊原兼秋」と白話との琴の描かれ方の違いについて、次のように述べている。

原據の、琴を風雅の道においてのみ捉え、琴を媒に伯牙と子期の友情を讃美する仕方は、琴の重要な意味合いを缺落させているのであって、中國における琴の傳統と些かずれているが、庭鐘においては、原據とはちがって、精確に琴の意義を把握している。庭鐘の記述こそ和漢の琴の傳統に合致しているのであった。（中略）それゆえ、原題の「兪伯牙摔琴識知音」をさりげないていで、「豊原兼秋音を聽きて國の盛衰を知る話」とものの見事にすり替えたのであり、琴をば終始「キン」と訓ませたのであった。

石破氏は、庭鐘が琴の伝統を熟知していたからこそ、「豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話」と題し、政治性を託したのだという。

丸井貴史氏「方法としての二人称―読本における「你」の用法をめぐって―」[4]は、「豊原兼秋」のキーワード「知音」には、「音を知る」時陰と兼秋の友情、「音を知らぬ」後醍醐帝への批判という二重の意味が託されており、友情と政治の二つの主題が併存していると論じている。

以上の先行研究をふまえつつ、本稿では、『英草紙』「豊原兼秋」の主題を題名の意味を解き明かしつつ検討したい。

二

本作品の主題を考えるにあたっては、主人公豊原兼秋がどのような人物であったか確認しておく必要があろう。石破洋氏「都賀庭鐘の翻案態度―『英草紙』第三篇における琴を中心に」[5]は、「豊原兼秋は周知の人物であったとは思えないし、『太平記』においても後醍醐の御輿をかついだ人々、その後生け捕られた人々の名前が羅列されているところに兼秋の名前が記されているに過ぎない」と述べている。石破氏の指摘する通り、『太平記』において兼秋が登場する場面は、巻第二「主上御出奔師賢卿天子の号の事」および巻第三「先帝囚はれ給ふ事」のみである。前者は、後醍醐帝の笠置臨幸に供奉した諸卿の内の一人「楽人兼秋」として、後者は、笠置没落後、後醍醐帝が六波羅探題に捕まったことに伴って捕縛された諸卿の内の一人「大夫将監兼秋」として、名前が挙げられるに過ぎない。『太平記』からは、豊原兼秋という人物が楽人で大夫将監の地位にあったということしかわからないのである。

庭鐘が、音楽が物語の展開に深く関わる「兪伯牙」を翻案するに

あたって、『太平記』中で楽人としてその名前の挙げられる豊原兼秋という人物は、主人公の候補として格好の存在であっただろう。しかし、『太平記』中の兼秋には、『英草紙』第一篇「後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く話」で主人公に採用された万里小路藤房のように具体的な人物像があるわけではないし、『太平記』の物語の展開を左右することもない。そのような人物であるにもかかわらず、なぜ庭鐘は、兼秋を主人公としたのだろうか。ここで『太平記』と「豊原兼秋」の時間軸を比較してみよう。〈表一〉に、『太平記』中の後醍醐帝の行動と「豊原兼秋」中の兼秋の行動を時間軸に沿ってまとめた。

〈表1〉

年	『太平記』後醍醐帝	「豊原兼秋」豊原兼秋
元弘元年（1331）	・八月二十七日、藤房、兼秋らを伴い笠置臨幸 ・九月三十日、笠置没落。公卿らとともに捕まる	・後醍醐帝の笠置臨幸に付き従う ・笠置が没落し捕縛される ・俸禄を取り上げられ、京都追放。流浪の身となる
元弘二年（1332）	・三月八日、隠岐配流	
元弘三年（1333）	・閏二月二十四日、隠岐脱出 ・伯耆国船上山に御所を設ける （鎌倉幕府滅亡） ・五月二十三日、船上山を出発。 ・五月二十七日、播磨国書写山へ行幸 ・五月三十日、摂津国福厳寺に逗留 ・六月六日、二条の内裏に遷幸	・初夏、還城楽を演奏中、よき音が出たことから後醍醐帝の開運を予感。都に向かう ・後醍醐帝が兵庫にいるのを聞き、兵庫に向かう ・公卿であった頃の俸禄に戻される ・秋、伊予国に宣旨の使として行く ・八月十五日、伊予国からの帰途、讃岐国屏風が浦で横尾時陰に出会う ・八月十五日、時陰を尋ねる 「兪伯牙」に由来
元弘四年（1334） 建武元年（1334）	・正月、諸卿の進言により大内裏造営を計画 ・政治に怠慢になり、御遊にふける ・佐々木塩冶判官高貞から竜馬が献上される	
建武二年（1335）	・藤房を失う（九月末頃か） ・北条時行、西園寺公宗ら謀反。足利尊氏によって平定 ・十一月、新田義貞を大将に尊氏追討を命じる	・この頃、山中村に下ったか

『太平記』では、元弘元年、後醍醐帝は兼秋を連れて笠置に臨幸し、その後、笠置没落によって兼秋を含む諸卿とともに六波羅探題に捕まっている。これらのことは先述の巻第二「主上御出奔師賢卿天子の号の事」、巻第三「先帝囚はれ給ふ事」に描かれているのであるが、この事件は「豊原兼秋」に次のように反映されている(6)。

豊原太夫将監兼秋は、元弘の始、後醍醐帝鎌倉の逆臣を避けて、笠置の岩室へ臨幸なりし時、諸卿と共に供奉に加はり、御輿など捧きたる事ありしが、笠置没落の時、兼秋も六波羅へ捕られ、糺明せられしかども、供奉したる斗にて、させる罪科なければ、禄を放ちて京城を追はれ、紀の本宮に下りて、少しの由緒ある方へ身を寄せ、在るに甲斐なき身となりて、二年を送りぬ。

「豊原兼秋」では、右のように、笠置臨幸と笠置没落を一文にまとめている。そのうえで、兼秋が俸禄を取り上げられ、京都を追放され、流浪の身となったという、『太平記』には描かれていない描写を加えている。

「豊原兼秋」における兼秋は、この後、元弘三年に笙で還城楽を演奏し、後醍醐帝の復権を予知する。そして、兼秋は、帝の動向を知ろうとして京都に向かうが、その道中で帝が兵庫に居ることを知る。

今宵主上の事を懐ひ奉りて調べける此の管、此の比に覚えざる妙なる音の出づる事、考ふるに、近頃主上聖運を開かせ給ふ事あるべし。都にいたりなば、其の動静の知れぬ事あるまじと、思ひたつより心忙敷く、其の夜に旅の調度とり認めて、明早に本宮を出で、夜を日に足して上りし程に、已に泉南の地にいたれば、此彼に人の打ち寄りて、いかめしく語るを聞けば、隠岐の帝、配所を御のがれ坐して、書写に御詣あり、今日しも兵庫に仙輿を蹕まらるるよしを、民の心にもうれしげに語るを聞く

後醍醐帝が隠岐脱出の後、播磨国書写山に滞在し、ついで摂津国福厳寺に逗留したという右の一節も、『太平記』の筋に沿うものである。この点については、中村幸彦氏が「新編全集」頭注(7)で指摘しているとおり、『太平記』巻第十一「先帝還幸の路次巡礼の事」に詳しい。「豊原兼秋」における兼秋は、後醍醐帝が兵庫に居ることを知り、兵庫に向かい、帝と再会する。そして、この後、「豊原兼秋」の中核をなす時陰との友情譚が描かれていくのであるが、ここまで見てきたとおり、作品の序盤において、「豊原兼秋」中の描写と『太平記』中の事件はいちいち照合が可能であった。つまり、「豊原兼秋」は、大枠において、『太平記』の時間軸の中にあると思われるのである。

三

前節では、「豊原兼秋」の時間軸が『太平記』に準ずる点について論じた。ただし、庭鐘が「兪伯牙」を翻案するにあたって、豊原兼秋という人物を主人公に据えた理由については、『太平記』につく限り、楽人であることを利用したということしかわからない。木越秀子氏「『英草紙』第三篇―蘊蓄についてのメモ―」(8)は、「豊原兼秋」において兼秋と時陰の間で琴に関する議論がなされるが、その議論における知識のもととなった資料について指摘している。

「新全集」が指摘する蘊蓄の根拠となっているものは、『東雅』

『独語』は別として、その他の各書は『楽家録』『體源抄』にも引用されている。第三篇の蘊蓄の多くは『體源抄』『楽家録』に負うところが大であると言ってよさそうである。

木越氏は、「豊原兼秋」における琴についての知識は、『楽家録』と『體源鈔』によるところが大きいと指摘する。『體源鈔』は、周知の通り、室町中期の楽家豊原統秋の著による楽書である。その『體源鈔』の中でも、第十三巻「當家豊原氏系圖事」には、豊原家の家系図が収められている。以下に兼秋の項を抜粋して引用する(9)。

兼秋　出仕常樂會　十一才時爲童躰　一者脩秋勅勘間也　從上将監元弘　三三八死四十七

兼秋の没年次に注目したい。『體源鈔』によれば、兼秋は元弘三年三月八日に四十七歳で没したという(10)。この事実を知った上で、「豊原兼秋」を読むと、ある矛盾に気付かされる。次は、「豊原兼秋」冒頭近く、兼秋が後醍醐帝のことを思い、笙を吹いた場面である。

元来家の伝ありて、音楽に妙なりしかども、此の年比の騒劇に紛れて、偶に糸竹を操るさへ、かかる漂泊の身の故にや、糸管の音さへ快く出でざれば、みづから操るに懶く打ち過ぎたり。①元弘三年の夏の孟、清女が更なりと称ぜし月の比に、心の趣く事ありて、鳳管を取り出だし、呂律を調る内にも、当初御遊に参りて目出たかりし事共を思ひ出でて、懐旧の涙つつみあへず、再び還幸を拝み奉る事も有るやはと、還城楽を籟きすましけるに、いつにかはり快き音の出でければ

兼秋は、笠置没落によって俸禄を没収されて漂泊の身となる。流浪の身で奏する音は濁ってよくないものであった。しかし、傍線部①「元弘三年の夏の孟」、後醍醐帝に仕官していたときのことを懐かしんで笙を奏すると、いつもとは異なる快い音が出たのである。兼秋はここに帝の復権を予知するのであるが、問題はその時期が「元弘三年の夏の孟」、元弘三年四月と設定されていることである。『體源鈔』によれば、兼秋は元弘三年三月に没しているにもかかわらず、「豊原兼秋」で兼秋が帝の復権を予知したのは、その直後の出来事なのであった。庭鐘が『體源鈔』を読んでいたことはほぼ疑いない以上、『體源鈔』と「豊原兼秋」の間に存するこのずれを看過することはできない。元弘三年三月に死んだ兼秋が、「豊原兼秋」では元弘三年四月に類まれなる出会いを果たしているということ、『體源鈔』と「豊原兼秋」の間に存する矛盾こそ、庭鐘の仕掛けた虚構の表象であるととらえたい。庭鐘は、「豊原兼秋」の物語が虚構であることを「元弘三年の夏の孟」の一句で読者に示すのである。そして、「豊原兼秋」の兼秋像は、史実の兼秋像を離れ、白話の世界に入りこみ、庭鐘独自の兼秋像をもって物語の中を生きていくこととなる。

四

それでは、庭鐘の描く兼秋像とはどのようなものであったのだろうか。「豊原兼秋」の終盤、兼秋による帝批判の場面を見てみよう。

兼秋云ふ、「それがし所存あれば、一度都にかへり、万とりしたためて、程なく罷り下り、時陰になりかはり、双親の終を見

とどけ奉らん。其の故は、②主上御位に復し給ひてより、仮初の御遊に琵琶箏など弾じさせ給ふにも、燕なる曲のみ造らんと望ませ給ひて、ことしげき世を治め給ふべき君にあらず。是、古より伝へいふ、桑間濮上の音起りて、国亡びしといふも、此の心なり。③久しからずして、都も又一変すべし。我も二君に仕へんよりは、早く身を潜めて、天年を楽しむべき所存なり」

兼秋が時陰の両親のもとに赴くのは、後醍醐帝に為政者としての器量がなく（傍線部②）、いずれ君主も他の誰かに代わるであろうから、二君に仕えるようになるよりは、隠居して、余生を楽しみたい（傍線部③）からであった。ここに原話「兪伯牙」にはない「豊原兼秋」の政治性がうかがえる。稲田篤信氏「演義の主題―都賀庭鐘『英草紙』考―」[11]は、『英草紙』が名分論の意識のもとに書かれた作品だとしたうえで、「豊原兼秋」の主題について以下のように述べている。

『雨月物語』「菊花の約」と同趣旨の話であることは一読して明らかである。名分論の主題は義兄弟の信義に尽くされているが、「菊花の約」の左門が母を捨てたようには、兼秋は父を捨てず、さらに時陰の身代わりになって父に仕える。二君に仕えない忠義の臣下、父に仕える孝子の主題がある。（中略）音そのもの、また琴を通じた交友の話柄の中に名分論的なモチーフがある。

稲田氏は、「豊原兼秋」には、義兄弟の信義、二君に仕えない忠臣、父に仕える孝子の三つの主題があるとする。そのうち、義兄弟の信義と孝子の主題は「兪伯牙」に由来するが、稲田氏は、庭鐘が「豊原兼秋」に新たにこめたものとして、二君に仕えない忠臣という主題を指摘している。「豊原兼秋」が、臣下としてのあり方を示した名分論的作品であるという指摘には首肯できるが、では、庭鐘が「豊原兼秋」に新たに付加した名分論的主題は、二君に仕えないというだけなのであろうか。兼秋がどのような臣下であったのか、同じく後醍醐帝を主君とする『英草紙』第一篇「後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く話」（以下「後醍醐」）の万里小路藤房と、「豊原兼秋」の兼秋の姿を比較することで検討してみよう。

「後醍醐」の藤房は、臣下として後醍醐帝を三度諫めるも、聞き入れられなかったために帝のもとを去る人物として描かれる。

藤房卿、第に退きて歎じて曰ふ、「治世の期、吁やんぬるかな。今主上智は奢に用ひ、弁は非を覆ふに足る。下官不才の言ひ動かすべきにあらず」と。遂に自ら官を辞して、北山の下に去つてかへらず。帝驚き思し召して、父の宣房の卿に詔して、是を求め還さしむれども、④竟に其の行く所を知らずなり給ひぬ。

藤房は、知識弁舌をもって諫めをやりこめる後醍醐帝を見て、その治世の終わりを予見し、北山へ去っていく。帝は、藤房を呼び戻そうと、藤房の父宣房を藤房のもとに遣る。しかし、藤房は、既に北山を去っており（傍線部④）、後醍醐帝との関係を完全に断絶し、隠遁してしまう。藤房のこのような生き方が、『太平記』巻第五「正慶大嘗会の事」における宣房の臣下のあり方を述べた「君に事ふるの礼は、その非あるに値つては、厳顔を犯し、道を以て争ふ。三たび諫むれども納れられざれば、身を奉じて以て退く」という言に基づくことについては、先に別稿において指摘した[12]。藤房が、帝のもとを去ったのは、帝を諫め、聞き入れられなければ去るという

帝の側近としての名分によるものであった。

一方、藤房同様に帝を批判し、隠居した兼秋は、どのような生き方をしたのであろうか。「豊原兼秋」の結末部を引用する。

（兼秋は）讃岐に下り山中村にいたり、老人夫婦につかへ、時陰にかはりて、其の終を送り、兼秋も我が子供を百姓となし、其の身は⑤入道して世を見かぎり、四国は南朝心腹の国なれば、道の通路自由にて、折節は吉野の皇居へも参りけるとなり。

兼秋は、時陰の両親に仕えるために山中村に下り、二人の臨終を見届ける。そして、兼秋自身は、傍線部⑤「入道して世を見かぎり、四国は南朝心腹の国なれば、道の通路自由にて、折節は吉野の皇居へも参」っていた。兼秋は、法体となり、後醍醐帝に仕えることはなくなったが、藤房と違い、南朝との交際を断絶することはない。兼秋と藤房の生き方の違いは、名分論に即し、両者の立場の違いによるものであろう。藤房は後醍醐帝の側近であったが、兼秋は一楽人に過ぎなかった。それでは、楽人兼秋は、音楽を駆使して、どのように帝や政治に関わるべきであったのだろうか。ここで、「楽」の古典的論書『文心雕龍』巻二「楽府」を顧みておきたい。

『文心雕龍』は、六朝の南斉末から梁初に成立した劉勰による総合的な文学理論書である。『文心雕龍』巻二「楽府」には、為政者と楽の関係について触れるところがある[13]。

⑥夫れ樂は心術に本づく。故に響肌髓に浹し。先王焉を慎み、務めて淫濫を塞ぐ。（中略）和樂の精妙なる、固より表裏して相資く。⑦故に詩は樂の心爲り、聲は樂の體爲ることを知る。樂の體は聲に在り、瞽師其の器を調ふることを務む。樂の心は詩に在り、君子宜しく其の文を正すべし。

『文心雕龍』は、傍線部⑥「夫れ樂は心術に本づく。故に響肌髓に浹し。先王焉を慎み、務めて淫濫を塞ぐ」と、音楽は人の心に基づくものであり、その響は肌や骨髓にまでひろくゆきわたるものであると述べる。理想的な君主である先王は、音楽が淫乱になるのを防いだのだという。このような「楽」論に基づくとき、「燕なる曲」つまり淫乱な楽を好む「豊原兼秋」の後醍醐帝はいかに君主としての資質を欠く人物であったか、その不器量のほどが浮かび上がってこよう。

『英草紙』における『文心雕龍』の影響については、つとに中村幸彦氏「新編全集」頭注[14]の指摘が備わる。

兼秋彼が言ばの俗ならざるを聴きて、船端に出でて、「いかに樵夫、糸の音を聴きて興ありとは、聞くべけれども、琴の品、曲の趣を知るにはあらじ」。樵夫云ふ、「我知らずして心をとどめんや。⑧詩と楽とは一躰両名、音を楽とし、詞意を詩とす。大人の弾じ給ふ琴の音は、今の世に伝わる隋唐の音にあらず。（略）」

中村氏は、『英草紙』中の傍線部⑧の部分が、『文心雕龍』の傍線部⑦を典拠とすると指摘している。その中村氏の指摘に対し、木越秀子氏「『英草紙』第三篇―蘊蓄についてのメモ―」[15]は、傍線部⑧の部分の典拠は『體源鈔』に求められるとして、中村氏の論を退けた。しかし、『文心雕龍』巻二「楽府」全体にまで視野を広げれば、庭鐘が『文心雕龍』を参観していたことを簡単に否定はできない。岡白駒施訓の和刻本『文心雕龍』が享保十六年に刊行されていることに鑑みても、庭鐘が『文心雕龍』を読んでいた可能性は十分に考えられよう。

『文心雕龍』巻二「楽府」には、また、次のような記述もある。

武帝禮を崇び、始めて楽府を立つるに暨び、趙・代の音を總べ、齊・楚の氣を撮む。延年は曼聲を以て律を協へ、朱・馬は騷體を以て歌を製す。桂華の雑曲は、麗にして經ならず、赤雁の羣篇は、靡にして典に非ず。⑨河間雅を薦めたるも罕に御せらる、故に汲黯譏を天馬に致すなり。

武帝は、礼楽を尊重して楽府を設立し、趙・代・斉・楚の曲を収集した。そして傍線部⑨にみえるように、河間の献王は雅楽を武帝に献上したが、武帝は、それをめったに演奏させることはなく、雅楽に親しんではいなかった。そのため汲黯は、武帝が天馬を得て喜びの歌を作ったことを批難したという。なお、河間の故事は、河間の献王が、雅楽をよくすることは治道に通じるという考えから、武帝に雅楽を献上したが、武帝はそれを日頃から演奏させることはなかったという『漢書』「礼楽志」の故事による。汲黯の故事は、武帝が名馬を手に入れた際に歌を作ったのに対し、汲黯が、名馬を手に入れた程度のことで作った歌は祭事を行う宗廟の前で演奏するような歌にはなりえないと批難したという『史記』「楽書」の故事によるものである。

『文心雕龍』に見える武帝の姿は、『英草紙』における後醍醐帝の姿と重なる。「豊原兼秋」において、後醍醐帝は「燕なる曲のみ」求めていた。また、「後醍醐」において、後醍醐帝は、馬を愛して天馬の到来をことのほか喜んだのであった。「後醍醐」における天馬到来の話は『太平記』巻第十三「竜馬進奏事」に由来するが、それにしても武帝と後醍醐帝がともに天馬を寵愛しているのは示唆的である。『英草紙』第一篇・第三篇における後醍醐帝は、『文心雕龍』の描く理想とする先王の在り方に背き、批判されるべき武帝の姿によく重なるものであった。『英草紙』の後醍醐帝が「楽」の本質を知らない帝として造型されているとすれば、「豊原兼秋」における楽人兼秋は、楽をもって仕えるものの立場から、その為政者としての不適格性を悟って、みずから帝のもとを去ったのである。傍線部②における兼秋の後醍醐帝批判は、「楽」の本質に鑑みれば、決して性急な結論ではなかったのだ。兼秋は、臣下としては後醍醐帝に与することはなくとも、隠居の後も南朝との交際を断つことはなかった。兼秋が「折節は吉野の皇居へも参」った（傍線部⑤）のは、政治とは関わりのない浅い交わりであったことだろう。「楽」に則った兼秋の姿勢にこそ、本話の主題が存するのである。

五

先行研究は、総じて、「豊原兼秋」の主題を「琴」に見出そうとしてきたといえる。石破氏「都賀庭鐘の翻案態度―『英草紙』第三篇における琴を中心に」[16]は、「豊原兼秋」と白話における「琴」の描かれ方の違いから「豊原兼秋」に政治性を読み取り、稲田氏「演義の主題―都賀庭鐘『英草紙』考―」[17]は、「琴」を通じて交友するという話柄に名分論のモチーフがあると論じた。これら「豊原兼秋」の主題を「琴」に読み取ろうとする傾向は、白話からの影響を大きく捉える姿勢に由来するものと思われる。しかし、翻案にあたって、庭鐘が「琴」を題名に取り入れていないことに注意すべきであろう。

また、先行研究は、「知音」の語に「豊原兼秋」の主題を求める

きらいもあった。木越秀子氏「樵夫横尾時陰―『英草紙』第三篇再考―」[18]は、兼秋が時陰のように「音を知る」ことはできない人物であるとしたうえで、以下のように述べている。

「音を知る」「音を聞きとる」とは、歌詞や譜のない琴の音から、世の中の「存亡吉凶」を聴き取ることが出来る能力ということになる。（中略）兼秋と時陰が義兄弟の契りを結び、「足下の伝へられし事も聞き、我が伝へし故実も語り」合おうと提案することも原話より切実な意味をもつことになる。琴の音から国の「存亡吉凶」を予知することができれば難を避けることができる。兼秋が時陰との義兄弟の契りに托したのは「存亡吉凶」を「音に聴き取る」ための秘曲の継承ということにあった。

木越氏は、「音を知る」ことと「音を聴く」ことを同義とし、「琴」の音から国の「存亡吉凶」を予知する能力としている。

「豊原兼秋」において、兼秋は、出会ったばかりの時陰に対して「唐土にも音を知るものは、其の弾ずる音を聴きて、其の人の思念する所を知る。我今思ふ所あらば、儛琴音を聞きて是を知るや否や」と述べる。ここにおいて「音を知る」とは演奏者の思念を感じ取ることであり、「存亡吉凶」を察知することではない。時陰は、兼秋の曲の心を見事に言い当て、その理由として、自らが源義家から琵琶の伝授を受けた家の末裔であり、管の譜に合わせて曲を聴き取ることができたことを挙げる。その直後の兼秋と時陰の会話を以下に引用する。

兼秋、「さればこそ聞き及びたる堪能の家にておはすれ。たとへ其の家にても、ただ糸竹の程拍子をよく覚えたるばかりにて、君がごとくに音を知るものは、未だ我が朝に聞き及ばず。我も琴を弾ずれども、⑩君がごとくに音を聞きとる事は及ばず。是天性の聡明にして、伝への為すべきにあらず」。時陰云ふ、「⑪琴は古代の音なるゆゑに、其の音に頌歌ありて聴くべし。今の糸竹にては、譜なきものの聴きとらるべきにあらず。全体皆興ある音なれば、存亡吉凶いかんぞ音に聴きとるべき」。兼秋云ふ、「足下のごとく音を識る人ありてこそ、我が琴の甲斐もあるべし。是以後結んで兄弟となり、足下の伝へられし事も聞き、我が伝へし故実も語りて、再び足下の家をも興すべきはかり事をなさん」と、互に心を傾けて、時陰は二十六歳にて、兼秋一歳長じたればとて、兄と敬ひぬ。

時陰は、今日の曲では国の「存亡吉凶」は測れないが、古代の「音」からはそれを測ることができるという（傍線部⑪）。木越氏は、この場面において、時陰が兼秋に対して、国の「存亡吉凶」を測る秘曲を托したというが、兼秋は時陰に出会う以前から、「音」に「存亡吉凶」を聴き取る能力を持っていた。

元弘三年の夏の孟、清女が更なりと称ぜし月の比に、心の趣く事ありて、鳳管を取り出だし、呂律を調る内にも、当初御遊に参りて目出たかりし事共を思ひ出でて、懐旧の涙つつみあへず、再び還幸を拝み奉る事も有るやはと、還城楽を籟きすましけるに、いつにかはり快き音の出でければ、何となく心いさみして、音声に心をとどめて想ふやう、此の一両年はしただみたる音のみ出でて、我が運命の拙き事を浅間敷く思ひたりしに、今宵主上の事を懐ひ奉りて調べける此の管、此の比に覚えざる妙なる音の出づる事、考ふるに、近頃主上聖運を開かせ給ふ事あるべし。

物語冒頭、兼秋は後醍醐帝に仕えていた頃を懐かしみ、笙を奏し、その音から帝の復権を予知している。国の「存亡吉凶」を、自ら吹く還城楽の「音」に聴き取ったのである。兼秋は、時陰のようには「音」を聴き取ることはできない（傍線部⑩）と告白しているが、帝の復権を予知し得る兼秋に「音を聴く」能力が皆無であったわけではない。ただし、兼秋には、「音を知る（識る）」能力、つまり、奏者の思念を察知する能力は備わっていなかった。だが、楽人兼秋にとって重要であったのは、「音を知る」ことではなく、「音を聴く」ことであった。その行為は右の場面に顕著にあらわれており、これこそが題名にも挙げられている「音を聴きて国の盛衰を知る」ことなのであった。

「知音」の語に着目した丸井貴史氏「方法としての二人称―読本における「你」の用法をめぐって―」[19]は、以下のように述べる。

音楽論から政治論への展開は原話にはない。すなわち琴を媒介とした友情の物語に、庭鐘は政治的話題を附加したのである。その改変の方法とは、「知音」という語に、本来の意味とは別に政治的な意味を持たせることであった。すなわち本作には、〈音を知る〉人物である時陰との友情と、〈音を知らぬ〉人物である後醍醐天皇への批判という、異なる主題が併存しているのである。それを可能にしているのが、「知音」という語に付与された意味の二重性であることはいうまでもない。

丸井氏は、「豊原兼秋」作中の「知音」の語に「音を知らぬ」後醍醐帝への批判の意味を見出そうとしている。しかし、「知音」の語には、本来的にも、「豊原兼秋」の物語中にも、政治性は含まれていない。何より、「豊原兼秋」において、兼秋自身も「音を知らぬ」人物として描かれているのである。「豊原兼秋」の政治性は、「音」「楽」の本義に立ち返って初めて浮かびあがってくるのである。

兼秋が「音を聴きて国の盛衰を知」った場面を思い返してみよう。物語の初め、兼秋が後醍醐帝の復権を予知した際に演奏していた楽器は、「鳳管」、すなわち笙の笛であった。そして、物語の終盤、兼秋が後醍醐帝の政権も長くは続かないことを予知したのは、帝が「仮初の御遊に琵琶箏など弾じさせ給ふにも、燕なる曲のみ造らんと望」むからであり、ここでは兼秋は、「琵琶箏など」の楽器の音を聴いている。原話の「琴」の物語は、「豊原兼秋」において、笛・琵琶・箏・琴など多種多様な楽器をめぐる物語となり、「音」「楽」全般の問題に敷衍されることによって、問題が「音」「楽」の本質に潜むことが示唆されている。

原題である「兪伯牙摔琴謝知音」は、原話の「琴」を介して得た「知音」という主題を端的に表している。その原話を、庭鐘は、「豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話」と翻案した。この題名にこそ「豊原兼秋」の主題が如実に表れている。「琴」「知音」という原話の主題は、翻案上の表面的な符合に過ぎない。『文心雕龍』の規定する「音」「楽」の本義と、そこに含まれる政治性こそ、「豊原兼秋」の真の主題であったのである。

【注】

（1）新編日本古典文学全集『英草紙・西山物語・雨月物語・春雨物語』『豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話』頭注（小学館、平成七年）

（2）麻生磯次「讀本の發生と支那文學の影響」（『江戸文學と中國

文學』、三省堂、昭和三十年二月）

（3）石破洋「都賀庭鐘の翻案態度―『英草紙』第三篇における琴を中心に」（『東方学』第五十五輯、東方學會、昭和五十三年一月）

（4）丸井貴史「方法としての二人称―読本における「你」の用法をめぐって―」（『読本研究新集』第七集、読本研究の会、平成二十七年六月）

（5）（3）に同じ

（6）以下、『英草紙』本文は、新編日本古典文学全集『英草紙・西山物語・雨月物語・春雨物語』（小学館、平成七年）による。

（7）（1）に同じ

（8）木越秀子「『英草紙』第三篇―蘊蓄についてのメモ―」（『北陸古典研究』二十五号、北陸古典研究會、平成二十二年十一月）

（9）『體源鈔』本文は、覆刻日本古典全集『體源鈔』（現代思潮新社、平成十八年）による。

（10）石破洋氏「都賀庭鐘の翻案態度―『英草紙』第三篇における琴を中心に」（『東方学』第五十五輯、東方學會、昭和五十三年一月）は、豊原兼秋の生没について「吉野朝時代の楽人で、弘安九年（一二八六）に生まれ、『體源鈔』（一三、豊原の系譜）によれば、四七歳で没している」と述べている。弘安九年と元弘三年の間には四十七年の年月がある。

（11）稲田篤信「演義の主題―都賀庭鐘『英草紙』考―」（『名分と命禄　上田秋成と同時代の人々』、ぺりかん社、平成十八年、初出「都賀庭鐘・演義の主題―『英草紙』考―」、『読本研究新集』第三集、翰林書房、平成十三年十月）

（12）拙稿「『英草紙』第一編における「諫」をめぐって―『太平記』を軸として―」（『山口国文』第四十号、山口大学人文学部国語国文学会、平成二十九年三月）

（13）『文心雕龍』本文は、新釈漢文大系『文心雕龍』（明治書院、昭和四十九年、五十三年）による。

（14）（1）に同じ

（15）（8）に同じ

（16）（3）に同じ

（17）（11）に同じ

（18）木越秀子「樵夫横尾時陰―『英草紙』第三篇再考―」（『近世文藝』九十一号、日本近世文学会、平成二十二年一月）

（19）（4）に同じ

［付記］

本稿は、第四十二回山口大学人文学部国語国文学会における口頭発表「『英草紙』第三篇における「音」」に基づき、その席上及び発表後に示された指摘を吸収したものである。

（かわた・まさき）